

2つの逡巡の衝突が生む悲劇という視点から *Hamlet* を読む

村上 世津子\*

(平成30年10月31日受理)

Reading *Hamlet* as a Tragedy Caused by Two Procrastinators

Setsuko MURAKAMI\*

Hamlet's procrastination has long puzzled the audience. Despite his desire to revenge his father's death on his uncle, and despite his promise to the ghost, he repeatedly delays taking revenge. Above all, the scene in which Hamlet, seeing the king praying alone, draws but sheathes the sword, impresses the audience with his procrastination.

Though Claudius appears to be capable, he also is a procrastinator. Since Hamlet is a son of the king whom Claudius killed, he knows Hamlet is vengeful and knows he should get rid of him, but he cannot. Instead, he asks him to stay, and agrees with Polonius's proposal to use Ophelia to test Hamlet's feeling. He even misses the chance after the nunnery scene and before the play within the play. Thus, Claudius resembles Hamlet in his procrastination and his, together with Hamlet's is the cause of the tragedy.

However, causes of their procrastination differ. Hamlet procrastinates because he is not fully convinced of his uncle's guilt whereas Claudius procrastinates because he cannot confront his guilty feeling. The important thing is that Hamlet's integrity, though it causes his procrastination, wins back Laertes and enables him to revenge his father's death on his uncle.

Key words: Hamlet, Claudius, Gertrude

## 1. はじめに

亡霊との約束にも関わらず Hamlet が何故復讐をためらうのかは読者や観客を悩ませてきた。特に Claudius が一人で祈っているのを見て「今ならやれる」と思って剣を構えるのに理由をつけて思いとどまる場面は Hamlet の逡巡を読者や観客に印象付け、その理由を模索させてきた。この場面は王の甥が王を毒殺して王位を篡奪し、妃を口説き落とす劇中劇の筋に立腹して Claudius が芝居をやめさせた後に来る。Hamlet はその理由を“A villain kills my father, and for that/ I, his sole son, do this villain send/ To heaven./ Why, this is base and silly, not revenge.”(3.3.76-79)と説明する。しかし Hamlet のこの理由を額面通りに受けとることはできない。劇の初めから Hamlet が問題にしてきたのは Claudius に裏表があることだからである。事実 Hamlet が退場した直後に Claudius は“My words fly up, my thoughts remain below./ Words without thoughts never to

\* 工学科(基礎教育・教養系)准教授

Associate Professor, Division of Fundamental Education and Liberal Arts, Department of Engineering

heaven go,”(3.4.97-98)と言って彼の祈りが口先だけの心の伴わないものであることを認める。Bradley はここでの Hamlet の逡巡について次のように述べる：

この出来事はその悲劇の転換点である。これまでの Hamlet の遅延は彼の自由と彼の生命を危険に晒してきたが回復不可能な害は及ぼしてこなかった。しかしここでの失敗はその後のすべての災難の原因である。王を助命する時に Hamlet は Polonius と Ophelia と Rosencrantz と Guildenstern と Laertes と Queen と彼自身を犠牲にする。(Bradley 136)

Hamlet の逡巡についての 1 つの有力な解釈は、Hamlet のルーツは Oedipus Rex と同じ土壌にあるとする Freud の解釈である。Freud は Hamlet が復讐できないのは「彼を復讐に駆り立てるべき嫌悪感が自己非難、つまり良心の呵責にとって代わられているからで、それは彼に彼自身は彼が罰しようとしている罪人と同じであることを思い出させるからである」(Freud 265)と述べる。Jones は Freud の説を発展させて “The Oedipus- Complex as an Explanation of Hamlet’s Mystery: A Study in Motive” という論文を発表したが、その中で「叔父を殺せという義務の要求に応じることができないのは、それが最初の夫であれ、2 番目の夫であれ、母の夫を殺せという彼の衝動の要求と結びつくからである。後者の要求は強く抑圧されているから必然的に前者も抑圧される」(Jones 101)と述べる。

Jones の論考は非常に説得力のある論考であるが、劇の初めで Polonius と Laertes が Ophelia に “His greatness weighed, his will is not his own/ He may not, as unvalued persons do,/ Carve for himself”(1.3.17-19)だから Hamlet の愛を真に受けるなど忠告することは劇が始まる前の Hamlet と Ophelia の恋愛関係が健全なものであったことを示唆する。Polonius の囮に使われて Hamlet から “To a nunnery go!”(3.1.148)に象徴される激しい言葉を投げつけられた時に Ophelia は “Now see what noble and most sovereign reason/ Like sweet bells jangled out of time and harsh”(3.1.156-157)と言って嘆く。Ophelia の台詞はかつての Hamlet が “sweet bells”であった、換言するならば Ophelia は Hamlet との恋愛関係を楽しんでいたことを示唆する。

劇の終わりで Gertrude が Claudius に毒殺されたことを知った時に Hamlet は “Here, thou incestuous, damned Dane!/ Drink of this potion. Is the union here?/ Follow my mother” (5.2.309-311)と言う。Oxford Shakespeare はこの “union”について “(1)the pearl (2)union with Gertrude”(Hibbard 351)という注をつける。大修館シェイクスピア双書は「ハムレットは真珠が毒であったことに気づいており、毒の真珠は王と王妃が死ぬときも一緒であることの象徴になる」と説明する(高橋 河合 381)。そして “Follow my mother”について次の説明をつける。すなわち「ハムレットの復讐が果たされた時、あれほどハムレットの心に重く、そして長くのしかかっていた父の名は語られない。復讐劇ならば『父の仇だ』という言葉が聞かれるべきところだが、復讐は母のためになされた感がある」(高橋 河合 381)。

なるほど Gertrude は Claudius の用意した毒杯をあおって死ぬ。しかしその毒杯はもと

もと *Hamlet* に飲ませるために用意されたものであり *Gertrude* が飲むことは想定していない。*Claudius* は衆人環視の下で2度までその真珠は *Hamlet* のためのものだと明言する。“The king shall drink to Hamlet’s better breath/ And in the cup an union shall he throw”(5.2.248-249)と “Hamlet, this pearl is thine”(5.2.264)である。しかも *Hamlet* は *Gertrude* が彼の幸運を祈って乾杯しようとするのを “Gertrude, do not drink”(5.2.273)と言って王が制止しようとするのを聞いている。*Laertes* が “Thy mother’s poisoned . . . the king, the king’s to blame”(5.2.305)と言う時に *Hamlet* は王が狙っていたのは自分であることに気づいたであろう。*Claudius* は既に *Hamlet* に切っ先に毒のついた剣で切られているのだから死ぬのは時間の問題である。もし *Hamlet* がマザコン男であるならば *Claudius* は彼の剣で死に赴かせ、彼自身が母の飲み残した毒杯をあおって母の後追いをするのではないか。*Claudius* に母の後追いをさせるのは生前に近親相姦の関係を持ち父の床を汚したなら死ぬ時も夫婦らしく一緒に死ねば良いといういかにも *Hamlet* らしい辛辣な皮肉である。*Hamlet* の父は “in the blossoms of [his] sin”(1.5.76)に *Claudius* によって毒殺され結婚の床も汚された。罪の盛りの *Claudius* に毒を飲ませて父の結婚の床を汚した相手の後追いをさせることは父が味わったのと同じ苦しみを味わわせたいという *Hamlet* の復讐の目的に叶うものである。毒杯を飲ませる時に *Hamlet* は父の復讐をするのであって母の復讐をするのではない。以上の反証を考慮するなら *Hamlet* の逡巡は *Freud* や *Jones* が考えるように「彼自身は彼が罰そうとしている罪人と同じであることを思い出させるから」ではないことがわかる。それでは3幕3場の祈りの場という絶好のチャンスで *Hamlet* が逡巡するのは何故かという振出しに戻る。

3幕3場の祈りの場のト書きの位置が正しいなら *Hamlet* が登場するのは *Claudius* がまだ跪いて祈りの姿勢をとっているが既に祈りを終えた後である。観客は *Claudius* 自身の言葉—

“Forgive me my foul murder”?

That cannot be, since I am still possessed  
Of those effects for which I did the murder,  
My crown, mine own ambition and my Queen. (3.3.52-55)

—を通して亡霊の言葉が正しかったことを知るが *Hamlet* は聞かないのである。剣を構えた時点で *Hamlet* が叔父に有罪判決を下す根拠は真偽の疑わしい亡霊の言葉と劇中劇を見ても *Claudius* の反応だけである。劇中劇の王は弟ではなくて甥に殺される。理論的には *Hamlet* に王殺しを命じる亡霊が地獄から来た悪魔の化身で *Claudius* が立腹したのは疚しさを突かれたからではなくて気の狂った *Hamlet* が王殺しを企てていると思ったからだという解釈も成り立つ。祈りの言葉を聞いていないのだから *Claudius* の祈りが王殺しの懺悔ではなく日常の罪を懺悔する祈りだと解釈する余地も残されている。振り上げた剣を下ろさずに鞘にしまうのは *Claudius* を断罪するには証拠不十分だと判断したからではないか。

さてここで問題がある。これまで Hamlet の逡巡は Oedipus 的な理由からではないという議論を展開してきた。しかしテキストを精読すれば Hamlet と Claudius の間に類似性が存在することに気づく。では一体どんな類似性が存在するのか、その類似性と *Hamlet* の悲劇がどう関わるのか次項以下で検討したい。

## 2. 劇の初めの Claudius

Claudius と Hamlet が初めて舞台上に登場するのは 1 幕 2 場である。この場面で Claudius は先王 Hamlet の妃にして Hamlet の母である Gertrude との結婚を布告し、外交問題に関する報告をして次に Laertes の願いを聞き入れ、最後に Hamlet に語りかける。このように Claudius が目の前に山積している問題を次々とテキパキ片付け未来を切り開こうとする有能な実務政治家の印象を与えるのに対していつまでも父の死に拘り “nighted colour”(1.2.68)を脱ぎ捨てることのできない Hamlet は過去にしがみつき自分の殻に閉じこもり、陰々滅滅として何ら行動を起こすことのできない、実務政治能力に欠如した印象を与える。1 幕 2 場はまだ亡霊が Hamlet に Claudius による王殺しを語る前である。先王 Hamlet の服喪期間が終わらないうちに母が叔父と再婚したことの中に不自然さを感じはするものの叔父に対する強い嫌悪感が何に由来するかは Hamlet 自身わかっていない。Arden 注によれば『レビ記』18 章 16 節、20 章 21 節及び *Book of Common Prayer* の “Table of Kindred and Affinity”に基づいてユダヤキリスト教の伝統では兄の死後に弟が兄嫁と結婚することは近親相姦の罪を犯すことだとみなしていた(Thompson and Taylor 209)。この考え方に基つけば先王 Hamlet の死後に Claudius が Gertrude と結婚するのは近親相姦の罪を犯すことだと思ひ母と叔父に嫌悪感を抱くのは正常な反応である。しかも父の死と母の再婚の間隔は短かすぎるのだから Hamlet が姦淫を疑うのも道理である。しかしながら他方では Ann Thompson と John O. Thompson が指摘するように “Nor have we herein barred/ Your better wisdoms, which have gone/ With this affair along.”(1.2.14-16)という Claudius の台詞は Claudius と Gertrude の結婚が重臣たちの賛同を得たものであることを示す(Ann Thompson and John Thompson 280)。“Tis sweet and commendable in your nature, Hamlet,/ To give these mourning duties to your father,/ . . . / but to persevere/ In obstinate condolment is a course/ Of impious stubbornness”(1.2.87-88; 92-94)と言う Claudius の台詞は道理に叶ったもののように聞こえる。“think of us/ As of a father”(1.2.107-108)という台詞は身内の者に対する思いやりに満ちた言葉のように聞こえる。そして衆人環視の下で Hamlet を次期王に推挙することは Hamlet に対する思いやりの証であると同時に Claudius の王位就任が決して Hamlet の昇進の邪魔だてをしていないことの宣言であるかのように聞こえる。しかも Laertes の France に戻りたい願望は聞き入れるのに、Hamlet の Wittenberg に戻りたいという希望は退ける。意思を曲げて王の傍にとどまって欲しいと懇願することによって Claudius がそれだけ Hamlet を頼りにしている素振りを伝える。Hamlet の嫌悪感にはそれを支持する根拠がないから Claudius にここまで愛情の素振りを示されるとそれを断ることができ

ない。*Hamlet* にできる精一杯の抵抗は、“I shall in all my best obey you, *madam*”(1.2.120、筆者強調)と言って彼が聞き入れるのは母の願いであって *Claudius* の願いではないという皮肉を込めた返事をするだけである。*Claudius* の外見の下に潜む悪を明るみに出し断罪できないもどかしさが *Hamlet* の鬱屈した気分一拍車をかけ “O that this too too sallied flesh would melt”(1.2.129)で始まる自殺願望の台詞を吐かせる。

以上議論したように一見したところ *Claudius* の態度はウジウジして行動できない *Hamlet* の態度と対照的であるかに見える。しかし *Claudius* の見せかけの行動力の背後には *Hamlet* と同様の優柔不断が存在する。*Claudius* は *Hamlet* を気遣う優しい叔父にして父のような存在を演じるために *Hamlet* の *Wittenberg* に戻りたいという願望を退け手元に置いておく。後に父を殺された *Laertes* に何故 *Hamlet* を処罰しないのかと詰め寄られた時に *Claudius* は次の2つの理由を挙げる。すなわち *Gertrude* が *Hamlet* の顔を見るのを生きがいに行っていることと *Hamlet* が民衆に愛されていることである。1幕2場で *Claudius* が *Hamlet* に *Wittenberg* 行きを思いとどまるように懇願する本当の理由は *Gertrude* の気持ちを慮ってのことであろう。*Hamlet* の希望を退ける前に *Claudius* は *Laertes* の同様の願いを聞き入れることによって物分かりの良い王を演じている。それならば *Hamlet* の願いにも同様の物分かりの良さを演じて *Gertrude* には *Laertes* もそうだが、この年齢の青年は遊学して広い見聞を身に着けるのが一番だ、*Wittenberg* で学友と楽しい時間を過ごせば父の死を忘れて *Hamlet* の気鬱も治るかもしれないと言って説得すれば良かったのである。その上で自分の監視下から離れるのが怖ければ学友をスパイに雇えば良かったのである。もし *Claudius* がこの時点で *Hamlet* を外国に追いやることに成功していたら以後の犠牲は全て防げ *Claudius* は先王 *Hamlet* 殺しはするものの善政を敷けたかもしれない。*Claudius* が必要以上に *Gertrude* の気を使わなければならないのは、先王 *Hamlet* の未亡人である *Gertrude* と結婚することによって地位を固めた(Thompson and Taylor 195)ことを自覚しているからであろう。

### 3. 亡霊の言葉を信じたくない *Hamlet* と王妃の言葉を信じたくない *Claudius*

#### 3.1 亡霊の言葉を信じたくない *Hamlet*

1幕2場で *Claudius* の説得に屈した *Hamlet* は母の早すぎる再婚を非難し、己の無力を嘆く独白をしている時に友人から先王 *Hamlet* の亡霊を見た話を聞くと、亡霊と会って “foul deeds will rise”(1.2.255)すれば行動できることを期待する。望み通り亡霊に会った *Hamlet* は事件の真相を詳細に聞かされる。すなわち庭でまどろんでいた時に忍び寄ってきた *Claudius* に耳から毒を入れられて殺された挙句に王位も妃も奪われた。懺悔の祈りをする暇もなく生前犯した罪を背負ったまま神の裁きの前に立たされたので贖罪のために煉獄で苦しみを受けている、ついては *Claudius* に父の仇を討ってくれ、ただし母には何もするなと言う。*Hamlet* は亡霊に約束は守ると誓う。それにも関わらず亡霊の話を聞いた後で *Hamlet* が行動を起こそうとする姿勢は見られない。むしろ亡霊の話を聞く前の

Hamletの方が命知らずで“Why, what should be the fear?/ I do not set my life at a pin’s fee.”(1.4.64-65)と言って友人の制止を押し切ろうとするし、それが功を奏さないと次は“T’ll make a ghost of him that lets me!”(1.4.85)と言って脅す。命知らずだった Hamlet が亡霊の話を聞いて二の足を踏むのは話の内容が Hamlet が想定していた悪をはるかに凌駕するものだからである。母と叔父の早すぎる結婚が示唆する近親相姦や姦淫なら母と叔父と Hamlet の私的な問題にとどまる。証拠を掴みさえすれば王の偽善を暴き失脚させることはさほど難しくないだろう。しかし Elizabeth 朝の世界観は「神と太陽と王と理性と正義の間に相関性がある」(Tillyard 93)と考える。そして *Troilus and Cressida* の“The heavens themselves”(1.3.85)から“Follows the choking”(1.3.126)の Ulysses の台詞が明示するように degree を乱すことは混沌をもたらすことだと考えられていたから国王殺しは一国の命運を左右すると考えられた。劇の初めで Fortinbras が、父が失った領土の返還を迫っていることが言及されるのは不当な手段を用いて王位に就いた王が支配する国は“disjoint and out of frame”(1.2.20)な状態にあることを示唆する。亡霊との約束を守り Claudius に復讐することは国家の立て直しを引き受けることだから Hamlet は軽々しく行動することができないのである。さらに厄介なのは Claudius が王位に就くことによって Denmark が本当に Hamlet による立て直しが必要な国家に墮してしまったのか定かでないことである。2幕2場では Claudius が抗議のために Norway に送った使節が戻ってきて Norway は Denmark の申し入れに応じ Fortinbras の徴兵を差し止めた旨を告げる。これは Claudius 治世下でも Denmark が国家として正常に機能していることを示唆する。もし Hamlet の予想に反して Claudius が見かけ通りであるならば Claudius 殺しを企てる Hamlet は大逆罪を企てることになる。だから Hamlet は動けないのである。

### 3.2 王妃の言葉を信じたくない Claudius

Hamlet の中に亡霊の言葉を信じたくない気持ちが潜在するなら Claudius の中には Gertrude の言葉を信じたくない気持ちが潜在する。2幕2場で Polonius が Hamlet の狂乱の理由を突き止めたと報告する時に Gertrude は“I doubt it is no other but the main—His father’s death and our hasty marriage.”(2.2.56-57)という核心を突く答えをする。Hamlet の父王を殺したのは Claudius だから彼の方が Hamlet の気持ちがわかるはずなのに何故 Polonius の話を聞いてみる気になるのだろうか。もし Polonius を彼と Hamlet の対決に介入させなければ Polonius 殺しに始まる一連の悲劇を防ぐことができたであろう。1幕2場で Claudius が Wittenberg に戻りたいという Hamlet の希望を退けるのは Gertrude の気持ちを慮ってのことだと述べた。それなら Claudius は何故ここで Gertrude の意見を尊重しないのだろうか。

“His father’s death and our hasty marriage”が原因だとする Gertrude の主張に賛同することは Claudius をして彼が犯した罪に向き合わせることを意味する。それは Claudius がどうしてもできないことである。自分の犯した罪の結果責任を引き受けられないから自分の心をごまかすために他に目を向けようとするのである。とは言え Polonius の話に全く根拠がないわけではない。Polonius が Ophelia に Hamlet の愛を真に受けるな

と命じ Ophelia が父の言いつけに従って Hamlet にすげない態度を示したことは事実だし、Ophelia が部屋で縫物をしていた時に訪れた Hamlet の奇怪な様子は他の場面の Hamlet の様子と明らかに異なるからである。

#### 4. Hamlet の狂気の原因が失恋でないことが判明した後の Claudius の対応

Claudius の逡巡で一番問題になるのは Hamlet の狂気の原因が失恋でないことが分かった後の対応である。3幕1場の尼寺の場で Hamlet が Ophelia に “Get thee to a nunnery. Farewell. Or, if thou wilt needs marry, marry a fool, for wise men know well enough what monsters you make of them”(3.1.136-139)と云うのを聞いた Claudius は “Love! His affections do not that way tend”(3.1.161)だと悟る。Claudius はさらに Hamlet の言い方は脈絡を欠くが狂人の戯言には聞こえないことに気づく。そして彼の心には何かわだかまりがあって、彼の気鬱はそのわだかまりを温めているがその卵がかえれば危険であることを敏感に感じ取り、その危険を防止するためには “He shall with speed to England”(3.1.168)だと結論づける。この段階では Claudius は England 王に Hamlet を殺させることは考えておらず England に送る直接的目的としては “demand of our neglected tribute”(3.1.169)を挙げ、副次的目的として “Haply the seas and countries different/ With variable objects shall expel/ This something settled matter in his heart”(3.1.170-172)を挙げる。役者が登場し Claudius と Gertrude が劇中劇を見るのは3幕2場である。亡霊の話聞いて Hamlet の気持ち Claudius 復讐に傾いていることは否めない。しかしながらこの段階ではその亡霊が本当に Hamlet の父の亡霊なのか、それとも地獄の悪魔の化身なのかは Hamlet にも決しかねるので亡霊の言葉の真偽を判定する手段を欲している段階である。

Ophelia を囚にする計画は完全な失敗に終わり失恋は Hamlet の狂気と関係ないことが判明した。Hamlet に激しく罵倒されて Ophelia の心は傷つけられた。それでもこの段階で Claudius が即刻 Hamlet を England に送ってれば被害はそこで食い止められたはずである。明々白々の事実を突きつけられて一度は “He shall with speed to England” という決断を下すにもかかわらず、その舌の根も乾かないうちに Polonius の提案に乗って事態を悪化させる方向に拍車をかける。なるほど Polonius の執拗な介入が Claudius の判断力を狂わせていることは確かである。しかし Polonius は王の悪事に一切関知していないのである。Polonius は Claudius の参謀にはなれないのである。参謀としての資格に欠ける者を参謀として起用し続けることこそ Claudius の弱さの証である。3幕3場の祈りの場で振り上げた剣を鞘に納めることが Hamlet の逡巡を象徴するなら3幕1場で Polonius の計画の失敗が明白になり Hamlet の処分を決断したのにその舌の根も乾かないうちに Polonius の提案に乗ることは Claudius の逡巡を象徴すると言えるだろう。

#### 5. 劇中劇を中断させた直後の Claudius の対応

3幕1場の尼寺の場後の Claudius の逡巡がその後を左右する致命的な誤謬であるなら3幕2場で劇中劇を中断させた後の Claudius の対応もまずい。劇中劇で王の甥が王の命を狙っていることが明白になった後に何故 Gertrude が Guildenstern と Rosencrantz を Hamlet の許に送ることを許すのか。Guildenstern が王様は“cholera(立腹)”(3.2.296)で引きこまれたと告げた時に Hamlet は“cholera”を「胆汁」の意味にとり“for me to put him to his purgation would perhaps plunge him into more cholera”(3.2.298-299)だから医者に見せた方が良くと言う。これは友情を捨てて王や王妃の手先になったかつての友人に対する痛烈な皮肉であるが半面の真理を突く言葉でもある。Hamlet の意図が王殺しであることが明確になった時に Hamlet の気持ちを探るために人を遣るのは無意味だけでなく時間の浪費である。Hamlet は探られていることを察知するから“Do you think I am easier to be played on than a pipe?”(3.2.361-362)と言って怒りを露わにするのである。Hamlet が怒りを露わにしているところに Polonius が登場して彼らと同じ用件を口にする。Hamlet は雲の形を話題にして Polonius をからかうことにより苛立ちを表現するが Hamlet の苛立ちは Claudius が一刻を争う時に時間を浪費していることをも示唆する。Hamlet の様子を探るために人を遣ったり母親に Hamlet の考えを問いただせたりする代わりに即座に Hamlet を England に送る実行力があつたなら悲劇を回避することができたであろう。

## 6. Polonius 殺しが Hamlet と Claudius に及ぼす影響

### 6.1 Polonius 殺しが Hamlet に及ぼす影響

Hamlet と Claudius 双方による相手の腹の探り合いで遅々として進まなかった劇は Hamlet の Polonius 殺しによって急展開する。劇中劇の反応から Claudius が有罪であると確信した Hamlet は母に呼ばれて私室に入ると母の関与の度合いを調べるためにのっけから攻撃的な態度に出る。読者は、母の私室に入る直前の Claudius が祈っている姿を見て振り上げた剣を鞘に納めた優柔不断の態度からの変化に驚かされる。叔父に対するよりも母に対する態度の方が激しいのは Hamlet の関心の中心が母にあると考える Oedipus 説の正しさを証明するかに見える。しかしながらこの違いは豹変ではない。祈っている王に剣を振り下ろすことは取り返しのつかない行為だが、母を激しく攻撃する時に Hamlet は“I will speak daggers to her but use none”(3.2.386)と決めているからである。息子に殺されることを恐れて人を呼ぼうとする母をじっと座らせた時に Hamlet が取り出すのは剣や短剣ではなくて母の“inmost part”(3.4.19)を映し出すために掲げる“glass”(3.4.18)である。劇中劇で叔父はボロを出したが母は出さなかった。だから母には別的手段で罪を暴こうとしているだけで復讐を企てようとしているわけではない。しかし Hamlet の思いは母には伝わらない。尋常でない Hamlet の激しさに殺されると思った Gertrude は助けを求めて叫び声を上げる。その声に応じて Polonius がカーテンの背後から声を出すのを聞くと Hamlet は Polonius を Claudius と間違えて刺し殺す。



ここで Polonius を殺すことが Hamlet の命取りになるが、王と間違っ て Polonius を殺したということは、予感と亡霊の言葉と劇中劇の反応を傍証するもの一物陰に隠れて Hamlet と母の最高度に私的な会話を盗聴する卑劣さ一が得られれば Hamlet は王を殺す心準備ができて示す。殺した相手が Polonius であることを知った時の Hamlet の反応一

Thou wretched, rash, intruding fool, farewell:  
I took thee for thy better. Take thy fortune;  
Thou find'st to be too busy is some danger. (3.4.29-31)

一には反省も謝罪も同情も感じられない。しかも Hamlet は彼が殺した死体を前にして平然と母の近親相姦ないしは姦淫の罪を追求する。これらは Hamlet の行動力を垣間見させると同時に Hamlet の冷酷と独善を示し観客の心を Hamlet から離反させる。

## 6.2 Polonius 殺しが Claudius に及ぼす影響

Polonius 殺しが Hamlet の復讐回路にスイッチを入れるならそれは Claudius の Hamlet 抹殺計画にもスイッチを入れる。それまでは Hamlet が危険であることを認識しつつも、できるだけ穏便にことを進めたいという思いから抜本的な対策が取れなかった。尼寺の場で Hamlet の気鬱の原因が失恋でないことが知った後も Polonius の意見に押されて絶好のチャンス逃したし、劇中劇直後の一刻を争う時も後手に回った。なるほど Claudius は Hamlet が母の私室を訪れる前に 3 幕 3 場で Guildenstern と Rosencrantz に Hamlet を England に送るから護送するように命じる。3 幕 4 場の母の私室の場の終わりで Hamlet が England 行きの話を持ち出し Gertrude が “Alack, I had forgot”(3.4.199) と答えることは Claudius が決して手を拱いていたわけではないことを示唆する。とは言え即刻 England 行きの手筈を整えるだけの実行力には欠けていた。

しかし 4 幕 1 場で Gertrude から Hamlet が Polonius を殺したことを聞くと Claudius は初めて Hamlet を野放しにしておく “To you yourself, to us, to everyone”(4.1.15) にとって危険であると Gertrude に言い、明朝早々に Hamlet を England に送るといふことと重臣たちを呼び集めて Hamlet の引き起こした事件を報告して善後策を考えると告げる。Polonius 殺しの前後で見られる Hamlet の England 送りに関する Claudius の対応の変化は今述べたことだけではない。一番大きな変化は Polonius 殺しの後 Hamlet 殺害を図ることである。4 幕 3 場で Hamlet を呼びつけて彼が引き起こした事件の対策として即刻 England 送りにすると告げた後の独白の中で Claudius は England 王宛ての手紙の中には “The present death of Hamlet”(4.3.63) という趣旨が認めてあると述べる。F では削除されている(Thompson and Taylor 383)が 3 幕 4 場 Gertrude 私室の場の終わりで Hamlet は “There's letters sealed and my two schoolfellows/ . . . / They bear the mandate”(3.4.200-202) と言う。しかしここでの mandate の内容が “The present death of Hamlet” だとは考えにくい。3 幕 3 場で Claudius が Rosencrantz と Guildenstern に

Hamlet の護送を命じた後で Claudius は罪の懺悔の祈りを試みるからである。実際には祈りを断念するが、真摯に祈ろうとすることは新たな罪—Hamlet 殺害を企てること—とは相容れない。むしろ引き返せるものなら引き返したいという思いが潜在していたことが Claudius の Hamlet 対策が後手に回った理由であろう。Polonius 殺害後に Claudius の態度が激変するのは一つには祈りが失敗していること、そしてもう一つは Claudius の命が文字通り危険に晒されているからであろう。

### 6.3 強気な Hamlet と腰が引けている Claudius

ここで注目しなければならないのは Claudius が考える断固とした処置が姑息な手段であることである。4 幕 3 場の冒頭のト書き “Enter King and two or three” は Q<sub>2</sub> に基づくもの (Thompson and Taylor 391) である。「F では Enter King とのみあって、王の台詞は独白であるように取れるが、Q<sub>2</sub> に基づけば独白ではなくなる」(高橋 河合 287)。独白かどうか、換言すれば廷臣たちの支持を得たものかどうかは不明であるが、いずれにせよ Claudius は 4 幕 3 場の冒頭で Hamlet を野放しにしておくことは危険であるけれども “Yet must not we put the strong law on him:/ He’s loved of the distracted multitude”(4.3.3-4) と言う。既に Hamlet 殺害を決意しているにも関わらず Claudius の腰は引けているのである。Polonius 殺しによって表面的には Claudius が追う側、Hamlet は追われる側に形勢が逆転した。Claudius の方が有利な立場にいるはずである。ところが 16 行目以降の王と Hamlet の会話を検討すると Hamlet の方がはるかに強気である。狂気を装ってはいるが、Hamlet は “Your fat King and your lean beggar is but variable service, two dishes but to one table”(4.3.23-24) と言って王と乞食を同列に扱うだけでなく “A man may fish with the worm that hath eat of a King and eat of the fish that hath fed of that worm”(4.3.26-27) と言って王と魚と蛆虫を同列に並べる。また “Where is Polonius?”(4.3.31) という王の問いに対して “In heaven. Send thither to see. If your messenger find him not there, seek him i’ th’ other place yourself”(4.3.32-34 筆者強調) と答える。この “th’ other place” は「地獄」を指す。つまり王を殺して王冠と王妃を強奪するような悪党は地獄落ち必定だ、死んだ Polonius が天国に行くか地獄行きかは分からないが、天国ならあんたとは無縁の場所だから人を遣って Polonius が来ているか聞いてみたら良からう、そこにいなければ地獄はあんたの行き先だから自分で行って探せば良いと皮肉っているのである。

Hamlet の痛烈な皮肉に対して王が返すことができるのは即刻 England 行きだという宣告を下すだけである。

Hamlet, this deed for thine especial safety—  
Which we do tender, as we dearly grieve  
For that which thou hast done—must send thee hence. (4.3.39-41)

「お前がしでかしたことの報いとして国外追放に処する」と告げるだけなら “this deed

must send thee hence”とだけ言えば良い。“for thine especial safety”から “thou hast done”までの挿入句は心の内に疚しさを感じている Claudius が単刀直入に物を言えず、Hamlet の気持ちを刺激しないように言葉を弄さなければならないことを示唆する。Cherubim は「人間の営みを監視すると考えられている」(Thompson and Taylor 394)から “I see a cherub that sees [your purposes]”(4.3.47)と言う時に Hamlet が意図しているのは「王の目的はお見通しだ」ということであろう。Hamlet は退出する前に王に “Farewell, dear mother”(4.3.48)と挨拶する、また “Thy loving father, Hamlet”(4.3.49)と訂正されると次のように説明する。すなわち “My mother. Father and mother is man and wife./ Man and wife is one flesh. So—my mother”(4.3.49-50)と言う。Hamlet の言葉は夫婦は一心同体だとする『創世記』2章24節『マタイ福音書』19章5-6節『マルコ福音書』10章8節を踏まえたものである(Thompson and Taylor 395)。夫婦は一心同体だから先王 Hamlet と王妃 Gertrude は一心同体である。お前は父である王を殺してその妃である母を口説き落として結婚することによって神聖な夫婦の絆を踏みにじった獣だと主張しているのである。

3幕4場で母の罪を暴き終えて気持ちが和らいだ Hamlet は漸く Polonius 殺しについて考えるゆとりを取り戻し “This bad begins and worse remains behind”(3.4.177)という感想を述べる。その後の劇の展開を考えるなら Hamlet の直感は正しい。にも関わらず4幕3場の Hamlet は劇の初めの Hamlet に比べて精力的に見える。それどころか Claudius よりも威圧的にさえ見える。4幕3場の Hamlet は決して空元気を出しているわけではない。劇の初めの Hamlet が行動できなかったのは証拠不十分だったからである。反対に優勢であるはずの Claudius の腰が引けているのは Hamlet に対する負い目を自覚しているからである。Claudius は大悪党ではあるが自分の心を騙し通せるほどの悪党ではないのである。

## 7. Ophelia 狂乱の場の Claudius

Ophelia の狂乱を目の当たりにした Claudius は次のように言う：

O, this is the poison of deep grief. It springs  
 All from her father's death, and now behold—  
 O Gertrude, Gertrude,  
 When sorrows come they come not single spies  
 But in battalions: first, her father slain;  
 Next, your son gone, and he most violent author  
 Of his own just remove; (4.5.75-81)

Claudius の言葉に反して Ophelia が正気を失う理由は Polonius の死だけでない。なるほど 29-32 行目で歌われる “dead and gone”(4.5.29-30)した人物は Polonius を指すし

“mountain snow”(4.5.36)のように白い “shroud”(4.5.36)を着る人物も Polonius を指すし “lay him i'th' cold ground”(4.5.69-70)される人物も Polonius を指すと思われる。その一方で 48 行目から 55 行目までの歌と 55 行目から 66 行目までの歌は恋人と関係がある。彼女の歌の中に登場する恋人は結婚を約束して女性の宝を奪っておきながらその約束を反故にするつれない男である。このつれない男は愛の告白を真に受けていたのに “Are you honest?”(3.1.103)と聞いたり “I loved you not”(3.1.118)と言いつつ放った尼寺の場の Hamlet を想起させる。Ophelia の狂った頭の中で父の死と恋人のつれなさが交錯するのである。Claudius は尼寺の場で物陰に隠れて Hamlet が Ophelia に投げかける臟腑を抉るような言葉を聞いていた。正気を失った Ophelia が口ずさむつれない恋人の歌を聞いて尼寺の場を想起しないことは考えにくい。問題は何故それを口にしないかである。一つは Gertrude に対する配慮が考えられるが、より大きな理由はそれを口にすることは何故 Hamlet の狂気の原因が失恋にないと分かった時点で即刻対策を取れなかったのかという問題、つまり Claudius の責任を認めることにつながるからであろう。

“first, her father slain; Next your son gone, and he most violent author/ Of his own just remove”も要注意である。受動態を用いて主語を明確にするのを避けることによって Polonius の死と Hamlet の結びつきを弱める一方で “and”から “remove”を付言することによって Hamlet の国外追放は彼が起こした事件の正当な報いであることを聞き手の Gertrude に訴える。Gertrude の気持ちを波立てないように最大限の配慮をした上で “the people muddied”(4.5.81)から “to inter him”(4.5.84)とすることによって国外追放に処すだけではあまりにも Polonius の死を軽んじた印象を与えて民衆の反発を買っていることをほのめかす。そして “Her brother”(4.5.88)から “his father's death”(4.5.91)の文に繋げることによって一番の問題は人々の不満の声が Laertes の耳にまで届き France から密かに帰国したほどだ、ことほど左様に口さがない連中の噂は恐ろしいものであると言う。実際には Claudius は護送する旧友たちに即刻 Hamlet を殺せという England 王宛ての親書を持たせているのだから Claudius の Hamlet 対策が寛大だったというのは大嘘である。Claudius の Hamlet 殺害計画を重臣が共有しているかどうかは 4 幕 3 場冒頭の Claudius の台詞が独白か否かによって解釈が異なるが、Gertrude が関知しないという解釈は揺るがない。Gertrude の了解が得られるなら自国の皇太子を外国の王に殺させるという “desperate appliance”(4.3.10)に頼る必要はないからである。とするならばここで Claudius が Hamlet に対する寛大な処置が民衆の不満、ひいては Laertes の帰国の誘因になっていることに言及するのは来たる Hamlet の死の伏線を張っているのだろう。

王の寛大な処置に対する民衆の不満は Claudius に “superfluous death”(4.5.96)を与えるという言葉にも関わらず兵を率いて宮廷に乗り込んできた Laertes に詰め寄られても Claudius は悠然としている。Laertes の攻撃をそらそうとする Gertrude の介入にも “Let him go, Gertrude, do not fear our person./ There's such divinity doth hedge a king”(4.5.122-123)と言いつつ放つ。Claudius は兄王を殺して王位を篡奪したのだから divinity が王を守らないことは自らの体験で知っているはずである。また Gertrude の介入を断ることは劇の冒頭で彼女の眼を気にして Hamlet の Wittenberg に戻りたいという希望を退

けて手元に置いた時の Claudius や Hamlet の狂気の原因は失恋にないことを知りつつも Polonius の介入を許し Ophelia を囮に使う Hamlet の狂気の原因を探った時の Claudius や、その作戦が失敗した後でもまだ Polonius の介入を断れなかった弱い Claudius と対照的な強い Claudius 像が打ち出されているように見える。Laertes が王の責任を追及している最中に Ophelia が戻ってきて妹の狂気を目の当たりにした Laertes が王に対する怒りを激化させても動じない。それどころかもし自分がいささかでも Polonius 殺しに関与しているなら “we will our kingdom give--Our crown, our life, and all that we call ours”(4.5.199-200)と言う。これは3幕3場の祈りの場で “My crown, mine own ambition and my Queen”(3.3.55)をあきらめられないから祈りの言葉が天に届かないと言ったのと対照的である。Laertes に与える言質を支える自信は Claudius 自身は Hamlet 殺しに関与していないという事実に基づくが、“we will our kingdom give” 云々は “if not”(4.5.201)以下の Laertes の協力を引き出すためのレトリックでもある。

## 8. Claudius の人心掌握術の限界

4幕7場冒頭の Claudius の台詞は4幕5場終わりの Claudius の台詞の続きである。4幕5場の終わりで “we will our kingdom give” と言って Laertes の関心を引き付けた後で “Sith you have heard and with a knowing ear/ That he which hath your noble father slain/ Pursued my life”(4.7.3-5)と続ける。この台詞の内容は Hamlet が旅回りの役者に甥が王を殺す話を上演させたことと、王と間違えて Polonius を殺したことを指す。王は立場的には Laertes に近いと説明することによって Laertes の関心をより一層自分に引き付ける。それでは何故大逆罪未遂事件を起こしたかどで Hamlet を厳罰に処さないのかという Laertes の問いに答える時に Claudius が Hamlet 暗殺計画を隠す(Thompson and Taylor 424)ことは注目に値する。王の優柔不断な態度のせいで父が殺されたと非難されても “You shortly shall hear more./ I loved your father and we love ourself,/ And that, I hope, will teach you to imagine”(4.7.45-47)という気を持たせる表現にとどめる。Laertes に Hamlet 暗殺計画を漏らさないから Messenger が Hamlet からの手紙を届けて計画の破綻を知った時に動揺を最小限にとどめることができる。そして Hamlet の帰国を逆手に取っていかさまな剣術試合で Laertes に Hamlet を殺させる計画を立てる。完全に王の話術の虜になった Laertes は王の計画に乗る。「教会内であってもハムレットを殺すと言うレイアーティーズはいわば殺しの神父を気取ることになる。そして毒の話率先して話だす点で、狡猾な王よりも卑劣さにおいて先んじることになる」(高橋 河合 331)。以上議論してきたように「この場面で Claudius の手際の良さは最高潮を迎える」(Hibbard 311)ように見える。しかしこの場面を詳しく検討すると強気な押し出しの背後に弱さが隠されていることに気づく。

Claudius は Hamlet を厳罰に処さない理由を隠すことによって窮地を切り抜けたが隠した理由を推測してみよう。「直接手を出せば自分の兄殺しの罪も暴かれかねないこと」(高橋 河合 319)も一つの有力な理由として考えられる。それなら何故「息子を思う母親の気

持ちを考えると公にはできないが既に暗殺計画は立ててある」と答えないのであるか。Claudius が巧みな言葉で Laertes を絡め捕るのは Messenger が Hamlet からの手紙を届けた後である。まだ完全に自分の手に落ちていない段階で外面と内実が異なる人物であることを明かすことは相手に警戒心を抱かせ心を離反させるからであろう。

Claudius の人心掌握術は一時的に彼の弱みを隠すことはできても消し去ることはできない。換言するならば Claudius の人心掌握術は Laertes の知に働きかけることはできるが情を動かすことはできないのである。4幕7場の終わりで Gertrude が登場して Ophelia の死を告げる。Laertes は最初 “Too much of water hast thou, poor Ophelia,/ And therefore I forbid my tears”(4.7.183-184)と言って泣くまいとする。しかし彼の意に反して涙を止めておくことはできない。そこで “When these are gone/ The woman will be out”(4.7.186-187)と言ってみるが、その言葉が虚しいことに気づく。Ophelia の死を悼む気持ち— “this folly”(4.7.189)—が Hamlet に対する復讐心—“a speech o’fire that fain would blase”(4.7.188)—を上回るのである。Laertes がここで吐露する自然な感情は5幕1場の Ophelia 埋葬の場でも示される。葬儀が終わって埋葬する段になって Laertes はまず “O, treble woe/ Fall ten times double on that cursed head”(5.1.235-236)と言って Ophelia を失った悲しみをその原因を作った Hamlet を呪う言葉に変える。しかしいざ土をかける段になるともう一度妹を抱いてやりたくなり墓に飛び込む。“Now pile your dust upon the quick and the dead”(5.1.240)と叫ぶ時に Laertes の頭の中にあるのは妹を悼む気持ちだけであり Hamlet への復讐心は忘れ去られている。皮肉なことにも、もしここで Hamlet が “This is I, Hamlet the Dane”(5.1.246-247)と言って墓に飛び込まなかったなら Laertes の復讐心は萎えて Hamlet との剣術試合は成立しなかったかもしれない。ごまかしによる王の人心掌握術の限界が露呈するのは5幕2場の剣術試合の最中である。4幕7場で王は Hamlet を厳罰に処することができない理由の一つを Hamlet の顔を見るのは王妃の生甲斐であるが王妃は “conjunct to my life and soul”(4.7.16)と説明した。しかし5幕2場で王妃が倒れるのを見ても王は “She swoons to see them bleed”(5.2.293)と言ってごまかす。王に騙されていたことを悟った Laertes は王の不正を暴く。Laertes が王の味方から Hamlet の味方に寝返った時に Hamlet は王に復讐を果たすことができる。

## 9. Hamlet の成長

### 9.1 Fortinbras 軍の行進目撃を通しての成長

Polonius 殺しから大詰めまでの間に Hamlet は彼の覚悟に貢献する3つの経験をする。その一つは4幕4場で Fortinbras 軍の行進を見ることである。Fortinbras 率いる Norway 軍と Poland 軍が “straw”(4.4.25)にすぎない “a little patch of ground”(4.4.18)のために何千人もの命と多額の金をかけて攻防戦をするのは “th’ impostume of much wealth and peace”(4.4.26)だと批判する一方で不確かな未来のために莫大な人員と費用をかける Fortinbras の心意気に感銘を受ける。Arden 注によれば多くの編者は次の Hamlet の台詞—

Rightly to be great  
Is not to stir without great argument  
But greatly to find quarrel in a straw  
When honour's at the stake. (4.4.52-55)

一の“not”は二重否定で「真の偉大さは行動に駆り立てる大義に欠ける時に行動を控えることに存在するのではなく名誉がかかっている時にはごく些細な原因の中にもやむにやまれぬ大義を見出すことだ」(Thompson and Taylor 401)と考える。しかしながら Hamlet は“straw”のために莫大な犠牲を払う愚を批判していることを踏まえれば上記の引用は額面通り「真に偉大なものは立派な動機がなければ動かないが名誉がかかっている時には動く」と解釈する方が自然であろう。Hamlet は名誉のためには理由を見つけ出してまで戦おうとする Fortinbras の意気込みに接して“have a father killed, a mother stained”(4.4.66)という立派な理由があるのに行動できない自分を恥じ今後は“My thoughts be bloody or be nothing worth”(4.4.65)と心に決める。

England 行きの船の中で王の姦計の証拠を掴んだ時に Hamlet は 4 幕 4 場の決意を実行する。Hamlet を即刻殺せと言う親書の内容をそれを持参する者すなわち Rosencrantz と Guildenstern を殺せと言う内容に書き換える。親書を読んで Claudius が大悪党であることを知ると Hamlet の迷いは消え、王殺しは“conscience”(5.2.66)に叶うものになる。そして絶対的な善の遂行のためには多少の犠牲はやむなしという考えに至る。

## 9.2 墓掘りの場の経験と Ophelia の死を通じた経験

Hamlet の覚悟に貢献するもう一つの経験は 5 幕 1 場墓掘りの場での経験である。Hamlet は Alexander や Imperious Caesar できえも死んだら“clay”(5.1.202)に戻るといふ現実を突きつけられる。死は生前の貴賤に関わらず万人を平準化するという一般論の他に Hamlet とゆかりのある人のしやれこうべを手にとることによって Hamlet にとって死が抽象的な遠い存在ではなく身近なものであることが感じられる。その身近な死の一つが“hath bore me on his back a thousand times”(5.1.175-176)してくれた Yorick の死である。そして Hamlet の死生観に決定的な影響を及ぼすのが Ophelia の死である。Hamlet は Ophelia の死を引き起こした張本人であるのに妹の死を嘆く Laertes の取り乱し方を目のあたりにすると加害者であることを忘れて“This is I/ Hamlet the Dane”と名乗り上げて Laertes の前に進み出る。「the Dane は Denmark 王を指すから the Dane と自称する時に Hamlet は王権を主張する」(Hibbard 248)。ここで問題がある。Claudius に対して“This is Hamlet, the Dane”と宣言するなら「お前は偽王じゃないか、正当な権利があるのは俺だ」という宣言になる。名前と身分を明かすことは決闘の作法を連想させる。実際名乗り上げた後 Hamlet は Laertes と取っ組み合いのけんかをする。この段階で Hamlet は Laertes が Claudius と結託して Hamlet の命を付け狙っているとは知らない。それなのに何故 Claudius ではなくて Laertes に“This is I/ Hamlet the Dane”と名乗るのだろうか。

Hamlet は結果的に Ophelia を死に至らしめるが Hamlet にとって Ophelia は地獄から解放してくれる聖母的な存在であった。尼寺の場で Hamlet があれだけ激しく Ophelia を苦しめたのは大修館シェイクスピア双書が指摘するように「すべての女は娼婦同然なのだから、おまえも例外ではなく、それならいっそ娼婦そのものになってしまえ」という気持ちを抱くのと同時に「すべての女は娼婦だが、おまえだけは尼のように清らかでいてくれ」(高橋 河合 400)という矛盾した願望を捨てられなかったからである。なるほど Laertes にとって Ophelia は “rose of May,/ Dear maid, kind sister”(4.3.156-157)かもしれない。しかし Hamlet にとって Ophelia は地獄から解放してくれる存在、女性ひいては人間が信じられるものであることを証明する礎であった。Laertes から引き離された時に Hamlet は “What is the reason that you use me thus?”(5.1.278)と言う。Hamlet の方からけんかを売っておきながら、ひどい言いがかりであるが Ophelia 喪失の重みで錯乱した頭の中では “kind sister”を失ったくらいでどうしてそこまで嘆かなくてはならないのだ、俺が失ったのは人間は信じるに足る存在だということの証なんだぞ、俺の喪失の大きさを考えてくれ、些細なものの喪失でそれだけ派手に嘆かれれば巨大なものを失った俺の虚しさは埋めようがないではないか、俺の気持ちにもなってくれということであろう。

今引用した台詞に続けて Hamlet は次のように言って退出する：

I loved you ever—but it is no matter.  
Let Hercules himself do what he may,  
The cat will mew and dog will have his day. (5.1.279-281)

“Let Hercules . . . his day”の解釈は「Hercules できさえも Laertes が勝ち誇るのを止めることはできない . . . [とも] . . . この小 Hercules にがなり立て続けさせるが良い、やがては俺の番になる」とも解釈される(Edwards 224)。278 行目の “I loved you ever—but it is no matter”は「言いたいことがあるが、どうでも良い」というニュアンスを持つ一種の諦観を表現する。とするならば “Let Hercules . . . his day”も前者の一種の諦観を表現する台詞と解釈する方が自然であろう。この諦観は Hamlet に人生には受容するしかない事柄が存在するという認識をもたらす。

## 10. 剣術試合と Hamlet

5 幕 2 場の大詰めで Osric から王が Hamlet と Laertes の剣術試合に賭けをしたが Laertes の相手を務めるかと問われた時に Hamlet は胸騒ぎを覚えながらも承諾する。そして “There is special providence in the fall of a sparrow./ . . . / The readiness is all”(5.2.197-200)という非常に有名な台詞を吐く。ここでの “readiness”は 4 幕 4 場で Fortinbras 軍の行進から学んだ、名誉のためには莫大な犠牲も厭わず戦う勇気と 5 幕 1 場の墓掘りの場で得た教訓、すなわち人間は生前にどんなに権勢を誇っていても死ねば土塊に帰す存在であること、そして Ophelia 埋葬の場で得た教訓、すなわちこの世には人間の



力では対処できないものが存在する、人知を超えたものに遭遇した時には受け入れがたい現実を耐え忍ぶしかないということを踏まえて、負ける可能性も考慮した上で名誉のための闘いに挑もうという決意を表明するものと思われる。

上述の決意の直後で剣術試合開始の前に置かれている Laertes に対する Hamlet の謝罪の言葉は批評家を悩ませてきた。「[Hamlet が口実として用いる佯狂]は Polonius の死との関連においても Ophelia の死と狂気との関連においても受け入れがたい。Hamlet が漠然とした説明しかせず、彼が受けている嫌疑について詳細に述べないことは控えめに言っても回避的に見える」(Thompson and Taylor 479)からである。Hamlet の謝罪を受けて言う Laertes の台詞も Hamlet の台詞と同様に不誠実で「Hamlet が彼の過失を巧みに言い抜けるのに対して Laertes は彼の復讐計画を偽り隠す」(Thompson and Taylor 480)。もし Hamlet が誠実な謝罪をしていたならば Laertes も誠実な対応をして剣術試合での惨劇は防げたかもしれない。Hamlet は他者の外見と内実の相違を激しく糾弾してきた。それなのに何故自分の過失を言い繕おうとするのだろうか。

Hamlet は 3 幕 4 場で Polonius 殺しについて “will answer well/ the death I gave him”(3.4.174-175)と言っていた。父を殺された復讐心に苛まれてきた Hamlet が彼に父を殺された Laertes の気持ちがわからないはずはない。もし Hamlet が誠実な謝罪をしたなら Laertes は “keep my name ungoled”(5.2.227) するために “will no reconciliation”(3.2.224) と言えなくなるから漠然とした説明しかしないのではないか。Laertes は Hamlet に父を殺され妹は理性を奪われて自殺した。Hamlet が感じる虫の知らせは、そのような相手とする名誉をかけた試合が果たして本当に “I will gain nothing but my shame and the odd hits”(5.2.157-158)で終わるのかという疑念であろう。虫の知らせにも関わらず相手を務めることを引き受けることは波乱が起こる可能性を考慮に入れた上で引き受けることを示唆する。不誠実な謝罪は一見 Hamlet らしくない台詞で Hamlet の弱さを露呈すると同時に自らに弓引く行為であるように見える。しかしながら Polonius と Ophelia に対してした行為の責任を引き受けるためにあえて不誠実な謝罪にとどめたと解釈するなら Hamlet の度量を示す台詞に転じる。

謝罪の言葉が “There is special providence”(5.2.197)から “Let be”(5.2.202)までの「神が人間の営みに直接的に介入するという Calvin 的なキリスト教の信条」(Thompson and Taylor 478)に言及し「神によって定められた成り行きを変えようと試みないこと」(Edwards 234)の意思表示をする台詞の直後に置かれていることは Hamlet の度量を表す台詞と解釈する方が自然であろう。

尼寺の場で Ophelia は Hamlet を “sweet bells jangled”と呼んだがここで Hamlet は劇が始まる前の “sweet”であった姿を取り戻す。だからと言って Hamlet は既に悲劇に向かって進行している行動を止めることができるわけではない。しかし Hamlet の神に定められた運命をあるがままに受け入れ正々堂々と戦い抜こうとする態度は Laertes に伝わる。Laertes は卑劣な手段を使うことを “against my conscience”(5.2.279)だと感じ始める。そして Gertrude が王の用意した毒杯をあおって死ぬのを見た時に己の卑劣さを率直に告白して王の姦計を暴く。毒が回り始めている Hamlet に残された時間はわずかしかないが

Laertes の告白のお陰で Hamlet は亡霊との約束を守り王に復讐することができる。Laertes は死ぬ前に Hamlet との和解を提案する。Ophelia 埋葬の場では Laertes は Hamlet のことを “cursed head”(5.1.236)と呼んでいたが和解の提案をする時には “noble Hamlet”(5.2.313)と呼ぶことも注目に価する。呼称の変化は劇の終わりで Hamlet が死と引き換えに英雄にふさわしい背丈を獲得することを示唆する。

## 11. 結び

劇の初めで結婚を布告し外交問題に関する報告をし、Laertes の願いを聞き入れて最後に Hamlet に語りかける Claudius は喪服を脱ぐことのできない Hamlet と対照的に見える。Hamlet は亡霊との約束にも関わらず行動できない。劇中劇に対する王の反応から亡霊の正しさを確信した後で王が一人で祈っている場に出くわした時でさえ振り上げた剣を鞘に納めて絶好のチャンスを逃す。しかしながら一見有能な実務政治家の印象を与える Claudius も行動を詳しく検討すると Hamlet と同等かそれ以上に逡巡することがわかる。1幕2場で Hamlet の希望を退けて Denmark の宮廷にとどまるように言うのは Claudius の本心ではない。Claudius にとって Hamlet は危険で遠ざけたい存在であるが Gertrude の手前優しい叔父を演じざるを得ないのである。Hamlet の気鬱の原因が失恋にないことは承知しているのに Gertrude の眼を暗ませ自分の心を騙すために Polonius の提案に乗って Ophelia を囮に使う。しかも尼寺の場でそれが反論しようもなく明白になっても Polonius の介入を断れないで Hamlet を国外追放する絶好のチャンスを逸してしまう。このように一見正反対に見える Hamlet と Claudius は逡巡するという点において似ているのである。

双方の逡巡により遅々として進まなかった行動は Hamlet が Polonius を殺すことによって動き始める。しかし奇妙なことには追う側において優勢なはずの Claudius の方が追われる側の Hamlet よりも腰が引けている。王の罪悪感には常に王が表立った行動をすることの邪魔をするからである。Hamlet の逡巡は、王は本当に悪党かという疑念と王殺しという一歩間違えれば神に弓引く大事業を前にした恐れから来るものであった。だから王が悪党であることが明確になると結果は神に委ねて行動する覚悟を身に着ける。Hamlet が行動力を身に着けたのは遅すぎ、本人は別にしても Polonius, Ophelia, Guildenstern, Rosencrantz, Laertes, Gertrude が犠牲になったことは否めない。しかし罪悪感から来る王の逡巡が破壊しか生まなかったのに対して Hamlet の土壇場での行動は王側についていた Laertes を Hamlet 側に寝返らせる。Hamlet は土壇場で王に復讐し父との約束を果たすことができるのである。

\*テキストは Shakespeare, William. *Hamlet*. 2006. Ed. Ann Thompson and Neil Taylor. London: Bloomsbury, 2017.を使用した。

## 引用文献

- Bradley, A. C. *Shakespearean Tragedy: Lectures on Hamlet, Othello, King Lear, Macbeth*. London: Macmillan, 1905.
- Edwards, Philip, ed. *Hamlet*. By William Shakespeare. Cambridge: Cambridge UP, 1985.
- Freud, Sigmund. *The Interpretation of Dreams*. 1900. Tr. James Strachey. London: Hogarth, 1953.
- Hibbard, G. R., ed. *Hamlet*. By William Shakespeare. Oxford: Oxford UP, 2008.
- James, Ernest. "The Oedipus-Complex as an Explanation of Hamlet's Mystery: A Study in Motive." *The American Journal of Psychology* 21(1910):72-113.
- Shakespeare, William. *Hamlet*. 2006. Ed. Ann Thompson and Neil Taylor. London: Bloomsbury, 2017.
- Shakespeare, William. *Troilus and Cressida*. 1998. Ed. David Bevington, London: Bloomsbury, 2015.
- Takahashi, Yasunari and Shoichiro Kawai, ed. *The Tragedy of Hamlet, Prince of Denmark*. By William Shakespeare. Tokyo: Taishukan. 2001.
- Thompson, Ann and John O. Thompson. "Making Mistakes: Shakespeare, Metonymy, and Hamlet." *Shakespeare without Boundaries: Essays in Honor of Dier Kehl*. Ed. Christa Jansohn. Delaware: U of Delaware P, 2011. 123-37. Rpt. In *Shakespearean Criticism*. Ed. Michelle Lee. Vol. 178. Detroit: Gale, 2018. 276-289.
- Thompson, Ann and Neil Taylor. *Hamlet*. 2006. By William Shakespeare. London: Bloomsbury, 2017.
- Tillyard, E. M. W. *The Elizabethan World Picture*. 1943. Middlesex: Penguin, 1984.